



教員として

幼稚園における教育は、「遊び」を中心に行っていることが特徴です。幼児は、自分から楽しい、おもしろいという体験や経験を繰り返しながら遊びに取り組んでいます。その経験の中では、悔しい・悲しい等の葛藤や友だちと協力しあえる喜びも味わいます。幼児自らの試行錯誤の遊びこそが、心の成長（発達）に繋がり人間形成の土台ができていくのだと思います。遊びは、五感に訴えかけるような環境が基本になるので、教師の役割としては見守ることや援助することが重要です。

ここで、二つの事例をご紹介します。

〈事例一 個人遊び〉園庭で、年長組の子どもが元気にスクーター競争をしている姿を、新入園児（年少組）の男児が「かっこいいなー」と眺めている。何日も傍観する姿が見られたある日、男児は、年長組の投げっぱなしのスクーターを手にし、見よう見真似で走らせようと思うようにならない様子。それでもスクーターを押ししたり、跨いだり、走ったり満足そうに楽しんでいる日が何日も続いた。ある日、ひとこぎできるタイミングをつかんだようで、よたよたするものの前に進めるようになっていた。年中組になった今では、友だちとスピードを楽しんだり、年少組の子に、こぎ方を教えたりと先輩風を吹かせている。担任は、見守りながら自分で達成できることを待っていたようだ。

〈事例二 集団遊び〉園庭の砂場の脇に手押しポンプ「ガチャポンプ」が設置された。登園してきた子どもたちは、「ガチャポンプ発見」「なんだこれ」と。早速、年長組R君が挑戦し水がジャアジャア出てくると、他の子ども「やりたい、代わって」の言葉が連発。

代わりそうにないR君に二十人位の子どもが「やりたい」と大騒ぎ。近くにいた先生が安全を考慮し使い方の説明や順番にやってほしい理由の説明をした。納得した子どもたちは、早速、順番を守り五回こいだら交代する等約束事を決めていった。ところが次に砂場の周りが水浸しになり、砂場で遊んでいた子たちが作った大きな砂山が崩れてしまった。おまけに水を使いすぎ、水が出なくなってしまうというアクシデントが勃発。そこで、R君を中心に年長組の子どもたちの話し合いがはじまった。先生もオプザーバーで話し合いに参画した。なるべく子どもたちの意見を尊重して見守っていると、「回数を減らす」「水が砂場の方に行かないようにする」「時間を決める」等たくさん意見が出された。

子どもは、自分が興味を持ち夢中になって「遊び」に取り組んでいる時こそ喜びや幸せを感じて、意欲的になり、困難を乗り越えられるような知恵と工夫が身に付いてくるのだと思います。主体的な遊びを楽しんでいるときに起こる葛藤は、まさに「学び」へ繋がるチャンスであると思います。子ども一人ひとりの考え方も感性も異なります。教師は、その子のありのままの姿を受け止め、「その子らしさ」を尊重し、見守ることやその遊びへの「見通し」を常にもつことが大切です。楽しんで遊んでいる子どもの「ワクワク・ドキドキ」の輝きこそが、「遊びの中から学ぶ」ということだと思います。そして、子どもが心で感じ・頭で考え・自分の力で行動できる「遊び」に寄り添い共感し、子どもと共に「学び」を広げ深めていくことが重要と考えます。

今まで多くの子ども達を見てきて、「自分の思いを言葉で表現する」ことが年々難しくなっているように感じられます。「語彙数」については、諸説ありますが、大体二歳で四百語程度、三歳で九百語、四歳で千六百語程度と言われています。それだけの言葉を習得していれば、コミュニケーションはそれほど難しくないと考えます。しかし、現実には子ども達の育つ環境によつて、かなりのばらつきが見られます。全く会話が成立しない子ども達も増えてきています。「言葉」の獲得を、育ってきた(後天的)環境の結果として捉えて考えてみると、何故会話が成立しないのかという疑問が生じてきます。後天的な環境としたのは、「狼に育てられた少女」の例を引くまでもなく、言語の習得はその置かれた環境によつてかなり左右されるということからです。バイオリンの独自の指導法で、世界的に有名であった、故鈴木鎮一先生とお会いしたのは、四十年位前だったと思います。先生から様々なことを教えていただきました。その中で、印象に残っているのが「人は環境の子なり」という言葉です。その具体的な例としてお話しになったことが、「何故、日本人は日本語を話すのか」という、とてもシンプルなことでした。アメリカに生まれた子どもは英語を話す。当たり前のように実は当たり前ではない。子ども達はその置かれた環境によつて育つのですから、周囲からその国の言葉で話しかけられ育つことで、母国語を習得し身に付けていきます。日本語の各地方の方言についても同じことが言えます。さて、子ども達を取り巻く環境は昔と比べかなり変わりました。スマートフォン、パソコン、様々なゲーム機器、テレビ、多様な子ども向けのテレビ番組等です。そうした物が家庭の中に溢れ

ています。子育ての状況も変化しています。核家族が増え、乳児期からわが子に言葉掛けをしない(或いは必要最低限の単語だけ)で育てる。加えて「言葉の省略化」がそこに追い討ちをかけています。短く省略された単語で行う会話(?)です。結果、習得している語彙数が少ないということです。つまり、育ちの環境が大きな要因と考えられることです。その結果、親子間で会話をする時間が大きく減ってしまい、双方向の会話が成立しづらい現実が生まれてきます。

そこで園での取組ですが、入園してきた子ども達との距離を縮めることから始めます。様々なコミュニケーションやスキンシップを通して、教師は安心できる存在であると信頼関係を築き、それと並行して多くの言葉掛けをしたり、他の子ども達も、その子に話しかけます。こうして「言葉」が溢れているという「環境」を作り出します。すぐに結果が出るわけではなく、最初は上手くいかないことが多く、言葉が出ないもどかしさで、手を出したりすることもありますが、続けることで、単語・言葉で表現する意欲が芽生えてきます。特に具体物、絵本や実物を使って保育を行います。次第にこちらの言葉(単語)を理解するようになりますが、発語と直接結びつかないこともあるので、待ったり促したり時間はかかります。そうして徐々に会話が成立していきます。結論になりますが「環境を通して学ぶ」のは、子ども達の言語習得だけではなく、音楽や運動、遊びに関しても、どんなに言葉が通じて、「言葉の力」だけでは、限界があるのです。子ども達に対しては教師自身が「環境」ですから、実践者でなければ説得力を持ちません。今のその世界が「環境」です。子どもの多くの可能性を追求するなら、まず始めることそして継続することです。

幼児期の教育に就くことができたことを皆さんは素直に喜んで下さい。養成大学でも教鞭をとる私が、いつも学生に聞くことがあります。「どうして幼児期の教育をしたいと思つたのですか？」がその質問です。答えの一番が「幼稚園の先生にやさしくしてもらい、私もそのようにしたいと思った」です。また大好きな母親が保育者だったことも多いと思います。幼児期はとても大事な時期だと思います。アメリカのノーベル経済学者のヘックマンは、アメリカの社会の中で、しっかりとした幼児教育を受けた人のその後を追跡調査し、その有効性がその後のどんな年齢の教育よりも勝ると調べました。経済学的に言えば、幼児期の投資が一番社会にとって効果的であると結論づけました。このことはOECD各国にもとりあげられ、幼児教育の無償化や義務化の論理的根拠にもなっています。お金の面の効果は別としても、幼児教育がその人の一生に多大な影響を与えることは、疑うことのできない事実でしょう。この仕事を選ぶ理由のほとんどが幼児期の体験に関わってきています。幼児教育の基本中の基本は、自分は愛されて必要とされていることを感じ、「やれるんだ！」と実感することです。そして自分を認め、人と共にいることが好きになる事だと思っています。これがないと、将来自分を出す(表現する)ことはできないし、努力し、小学校以降に技能や知識を付けることなどありません。そして世の中に出て他者と共に課題を克服していけるはずもないのです。これらは、多くの人が言ってきたことであり、また、私も信じていることです。が、なかなか実証的なことに繋がらないこともあります。

無藤隆(白梅学園大学教授、子ども・子育て会議の座長)は早期教育をする者は、このようにすべきと言っています。①(早期教育が)子どもにどのような影響をあたえるか。効果・エビデンスをあげる。②一日における、それに関わる時間をあげる。③そのことに対する対価(金額)をあげる。

そんなことを思っていると、あるテレビ番組がありました。オリンピックの体操の金メダリストの内村航平君を育てた母君の体操教室の一面面です。そこで自分と子ども達との関わりのポリシーを言っています。一歳から六歳までの時期がとても大事な時期である。①六歳までは褒めて育てる。②六歳を超えたら、挫折や悔しさも味わわせたい。③集中力やイメージの広がりには体操選手として大事にしたい。こんなことだと思えます。

また、若手ダンサーの世界的登竜門であるローザンヌ・バレエコンクールで金賞をとつた二山治雄君の指導の塚田先生は、①二歳から六歳の子にはまず踊ることの楽しさを感じさせること。②成長にあわせた指導を心掛ける。③はやければいいことでなく基礎基本を重視。④十一歳を過ぎたら、はつきりとした言葉による指摘も大事と言います。

なるほどです。彼らはアスリートとして一定の成功を収めた、収めつつある選手です(つまり成果・エビデンスが示されている)。それを育て上げたコーチは一樣にこう言っています。

なんだ、幼児教育はいつもこのことを言っている、と私は思いました。私たちは決して一番の金メダルをめざしているわけではありません。しかし、共通することがあるのです。幼稚園の先生になる方は、このことをぜひ忘れないでください。それは今を大切にし、早く出来たことを(結果を)優先する先生にならないことです!

いつまでも学ぶ姿勢を忘れずに！

「幼・保・小連携」という言葉を聞いて、どんなことを考えますか？

幼稚園・保育所で、のびのびと遊んでいる幼児の姿やグループになってお絵かきをしている姿が想像つきますか？小学校に入学した一年生は、どうでしょう。机に座ってしっかりと勉強をしている様子が目に浮かぶでしょうか？また、小学校入学当初の「スタートカリキュラム」について、知っていますか？

私は、退職する時期が近づいても、毎日新たな発見があり学ぶことばかりです。

一般的に、小学校の運動会で一年生は、校庭トラックの中央部分を直線で走ることが多いですが、幼稚園・保育所の運動会を参観すると、小さなトラックを上手に走っている姿を見かけます。卒園式に出席した時は、長い呼びかけも大きな声で言えるし、しっかり椅子に座って話を聞くこともできていました。初めて見た時、すごい驚きと感動でした。

保護者の方は、幼稚園時代は、子どもに対して「よくできたね。」「すごいなあ。」と、プラス思考の言葉をかけて感激しますが、小学校に入学した途端、「早くしなさい。」「もつとがんばってね。」などと、比較するような声をかけることが多くなります。一年生になると競争の世界に入るのかもしれない。教師も、幼児期の発達段階や活動等をあまり把握せずに、一年生に対してすごく背伸びをするような声掛けや指導をしてしまうことがあります。こうした小学校への段差をスムーズに乗り越えていくためにも、教師自身が、多くのことを学び、担当学年の実態に応じた対応・指導をしなければならぬと思います。特に、一年生の担任になった時は、幼児期の情報を得て、一人一人に沿った話し方や支

援をする必要があります。入学当初の四月～五月は、幼児期に体験してきた遊びや生活経験と小学校で学ぶ教科学習や集団生活等を併せもった学習の流れや内容にして、合科的に扱うことにより円滑な接続が図れるよう配慮することが大切です。これがスタートカリキュラムです。

現在、どの小学校も幼稚園や保育所との連携を進めています。しかし、効果のある連携を図った活動やお互いを理解した上での子どもへの支援をしているかどうかは疑問に思います。保育者と小学校教師同士が、学ぶ心、お互いに信頼・理解する心をいつも念頭において教師生活を過ごしていけたら素晴らしいことだと思います。幼・保・小連携がスムーズにいくと、小中一貫教育もすばらしい連携が図れると思います。

今、担任している子どもや保護者、そして、学校職員、研修会での仲間等から多くのことを学んでいると思いますが、それは、今後どこかで必ず役に立ちます。これからも毎日の出来事や校務分掌などを、すべて学びであると捉えて、プラス思考で生活してほしいと思います。

若い先生方には、学び続けることの大切さや、子どもとかかわれるすばらしさを忘れずに、「二期一会」を大切にして過ごしてほしいです。いつまでも輝き続けることを願っています。

「先生、明日の授業、手を挙げてあげっかんね！」ほとんどの授業中、さぼっていることが多いYが、珍しく声をかけてきた。明日は研究授業の日である。しかも、文部省指定研究校の公開研究授業で、大勢の先生方が見に来る道徳の授業である。授業は「マザーテレサの生き方」についての授業であった。当日、いつもと同じようにYが登校してきた。「今日は、頼むぞ」と声をかけると、生返事だったので少し不安であった。大勢の参観者が集まってきて、当日の教室は緊張感が漂っていた。Yを含む数名の気になる子（生徒）の授業態度はどうだろうかという不安の中、授業が始まった。授業が進み、マザーテレサの生き方について質問する場面があった。なかなか、手が挙がらず焦っていると、Yが手を挙げたのである。どんな答えをしたか、残念ながら覚えていないが、自分の中では非常に感激し、感動したことを覚えている。いつもは反抗的な態度で注意ばかり受けていた彼が、約束どおり手を挙げて、答えてくれたのである。その後、授業は予定どおり進み無事終了した。授業後は分科会等が予定されており、慌ただしい中だったので、Yとはろくに話もせずの下校となってしまった。これは、今から二十年ほど前、当時担任だった中学校二年生の道徳の授業での出来事である。なぜか、今でもこの日の出来事を覚えている。いつも机に伏せていることが多くやる気のない姿が多かった彼が、なぜあの場面で、手を挙げて答えてくれたのか、その理由を聞く機会は残念ながらなかった。しかし、帰る時に彼の表情を見たときに、「ありがとう」「どういたしまして」という会話を、お互いの心の中で交わしたように感じた。時には、個別指導で勉強を教えてあげたお礼だったのかどう

かよくわからないが……。その後の彼の態度が変わったかという点、残念ながら、テレビドラマのようにはいかず、卒業式まであいかわらずであった。しかし、今まで、指導の対象であった彼から、思わぬプレゼントをもらったような感激は今も忘れない。裏切られることの方が多く、いつも何で気持ちをつからないのだろうと思っていたが、たった一度の発言で、教師としての面白みを感じさせてくれた彼に感謝である。

二十一世紀に入り、少子高齢化、知識基盤社会への移行とグローバル化の進行、価値観の多様化など大きく変化し、学校現場でも、教育格差の問題、学力の二極化、発達障害児への対応など、たくさん課題に直面している。またここ数年で多くの教職員が退職し、多くの若い教職員が採用される時代になってきている。希望に燃えて、教職についた先生方も、多くの悩みに直面すると思う。時には精神的に疲れ、辞めてしまおうかと思うことがあるかもしれない。しかし、子どもの一言、純粹な笑顔に救われ、やる気をもらうこともある。そんな一瞬の喜びが、次への活力となることは間違いない。そんな些細な喜びに出会うことを何回か繰り返しながら、私も自分自身を奮い立たせながら勤務してきた。若い先生方にも、子どもとの一瞬の素敵な出会いを多くもっていただきたいと思う。

教員生活も残りわずかになってきた現在、今までを振り返ると、いろんな先輩、同僚、そして児童生徒、保護者、地域の方々との出会ってきたが、その時々で、それぞれに助けられ、励まされてきたと感謝の気持ちで一杯である。まさしく「我以外皆我師也」である。

心根は優しいのに、上手に自分を出すことのできない男子児童がいた。出てくる言葉もぶつきらぼうで、体も大きく周りの子たちからすれば威圧感があつた。よかれと思つての言動さえも、注意や指導を受けることの多い子だつた。その児童も含めた六年生が教科学習の中で「学校をもっとよくする提案」を書いたから読んでほしいと持ってきた。一所懸命考えたあとがわかる提案の数々に、できる限り応えたいと思つた。実現できそうにないものもある中で、男児のそれは、施設の安全面から考えた現実的な提案だつた。「素晴らしい提案です。少し時間はかかるかもしれないけれど、実現に向けて取り組みたいと思います。」と返事した。返事をした半年位後に彼の提案が実現した。

卒業して何年か後に男児の母親から、「あのとき、子どもの提案を認めてもらい、実現してもらつたことで、あの子は救われました。自分に自信をもつきっかけになり、親子ともに感謝しています。」との手紙をもらつた。母親が感じたような大それた思いをもつてやつたことではない。本当に素敵な思いつきだと思つたから称賛し、実現に力を尽くした。心からの称賛が彼を変えきつかけの一つになつたかもしれないと思ふ。

人のよいところを言葉で伝えることは、やさしいようで難しい。短所や欠点はすぐに目につき、あれこれ指摘することはできても、人のよいところや魅力を感じ取り、相手に言葉で伝えられる人は多くない気がする。

かつて勤務した職場で仕えた上司は、教職員のよいところを伝えることが上手だつた。嫌みのない、言われた人が思わず心をくすぐられてしまうような言葉かけ。言われている本人でさえも気付かない「よさ」をさりげなく伝えることの上手な人だつた。そんなところまで見てもらつていたのか、とうれしくなる。しかも、その言葉の中には、注意しなければ聞き逃してしまうような示唆も含まれていた。未熟な私は、声をかけられたことだけに心が浮き立つてしまい、言葉の裏に隠されたメッセージの数々を見逃していたことが悔やまれる。

その上司は、周囲の人にも聞こえるように、職場の一人一人にさりげなく声をかけることのできる人だつた。わざとらしさがなかった。その姿から、管理職は何気ない風を装いながら、見るべきところはきちんとして見ているのだな、さすがだな、と思つた覚えがある。

管理職の姿勢が学校の中の人間関係をよくしていた。教職員は、皆認められていると実感できた。確かに、その職場は居心地がよく、一人一人の教職員がそれぞれの持ち場に責任をもって勤務している雰囲気があり、子どもも比較的落ち着いた生活を送っていたと思う。

そんな職場を経験したことで、ふだんからきちんと一人一人の子どもを広い心で見守り、「よさ」を引き出し、伝えることを自分に課した。それが、先の男子児童へのメッセージにつながつたのかもしれない。

とはいえ、残念ながら、私自身は理想とする伝え上手にはなれなかつた。なかなか一朝一夕には真の褒め上手にはなれない。なれないままに教員生活を終わらざるを得なかつた。先生方には、「人を育てる」ために、人のよいところを見出し、相手の心をくすぐるような言葉かけの名人になつていただきたいと思う。

若い頃、子供ができないまま活動を終わりにしてしまふことを許せない教員だった。放課後や夏休みには、漢字や計算、逆上がりにも水泳などの個別指導をしつこいくらいに実施した。よく言えば情熱的だが、かなり厳しい指導をしていたため、とりわけ運動が苦手な子にとっては、「鬼」に見えたに違いない。

教員になって八年目、四年生を担任しN子と出会った。肥満体型で、水泳以外は全て苦手。走ればダントツのビリ。ポートボールではコートにいるだけ。跳び箱の上にも乗れずマットでは起き上がれない。毎日、私の容赦ない叱咤激励が飛ぶ。N子にしたら地獄のような日々だったろう。だが、彼女は一切弱音を吐かずに頑張った。鉄棒で前回りができたときの嬉しそうな笑顔を覚えている。

ある日、体育の時間に登り棒をやらせてみたら、しがみつくもずり落ちるの繰り返し。体を支え足の使い方などを数日間指導したものの、全く効果なし。さすがの私も限界を感じ、「N子を苦しめるだけだ」と指導を止めた。その日の昼休み、N子を含む三人の女子がビニルテープを借りて来た。翌日も翌々日も……。一週間後、子供達を追ってみると、N子が登り棒を練習するという。一本の棒にテープが十〜二十センチ間隔に巻かれていて最も上は約三メートルの高さに赤いテープが見えた。「先生、N子はね、あそこまで登れたんだよ」というR子の得意げな声。「Nちゃん、登って見せなよ」とS子。いつの間にか集まってきた級友達の「頑張れ！頑張れ！」の声にお尻を押され、N子の体が地面から浮いた。ゆっくりではあるが、確実に登っている。そして、赤いテープ、彼女にとっての

最高点を右手が超えた。「ウソだろう？」と私。万雷の拍手！「やったー！」の声とN子の満面の笑顔。すかさずR子が最高点まで登りテープを巻いて降りてきた。二人はビニルテープを使って目標を明確にし、励ましながらN子の意欲を引き出していたのだ。まさにスマールステップ！「子供ってすごい！」脱帽だった。

この出来事は、私の指導方針を根底から覆すこととなった。最大の違いは本人の意欲喚起という点である。私は、やる気の有無にかかわらず、「できるまで何度でもやらせる」を基本とした。N子は「できるようにになりたい」という願いをもっていた。しかし、残念なことに練習をやらされていたのである。願いと意欲は違う。苦手を克服する際の意欲は頑張ればできそうな目標が見えたときに生まれるものである。それがビニルテープであった。N子は「十センチなら頑張れそうだ」と、ビニルテープの魔法にかかり、友達に励まされながら意欲的に取り組んだ結果、自己記録を更新することができたのである。

若い先生は、一生懸命指導しているのにあまり効果が見られないとき、とかく自分の未熟さを責めがちになる。そんなときは、立ち止まり子供に任せてみるといい。子供同士の力が共感できるため、事態が好転するものだ。学校は、集団で生活する中で生きる力を育む場であるから、子供同士のかかわりを核としなければならぬはずである。ただ、子供に任せると言っても、指導を放棄するわけではない。我々教師は、一人一人に寄り添い、絶対に見捨てないで面倒を見てやるのが重要である。子供は誰でも苦手なことをできるようにになりたいと願っている。苦手なことを克服させてやるのが我々教師の使命であり、できなかったことができたときの最高の笑顔に出会えるのが教師の特権なのである。

学習指導要領解説道徳編（小学校）には、「道徳教育の内容は、教師と児童とが人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。」という文があります。これは、昭和三十三年に道徳の時間が特設された際に、中学校道徳指導書に記載されたものとほぼ同様の文です。道徳教育における不易なものです。今後、絶対に変わってはならないことだと確信しています。

私は新規採用教員として赴任した小学校で、私の教員人生に大きな影響を与えてくださった先輩のN先生と出会うことができました。N先生は教務主任として、私を温かく育ててくださいました。そして、あれから三十有余年、退職の年を迎えた私は今も八十歳を超えたN先生に御指導いただいています。実は、N先生は道徳教育のすばらしい研究者であり実践者なのです。同じ勤務校で直接御指導いただけたのは一年間だけでしたが、私が道徳教育の研究と実践に長期にわたり取り組めたのは、N先生の人としての生き方から多くのことを学び続けることができたことが大きな力になっているためです。

道徳教育の研究に本格的に取り組んで、今年度で三十二年目となります。この間、私がかけてきたことを二点に整理してみます。

一 教師である前に人間として未熟であることを自覚して人柄を磨く

道徳教育の内容は、教師自身の課題であることを常に忘れないようにしてきました。私自身、今でも未完成で途上の人間であることを自覚しています。校長職を拝命してからは特に意識してきました。教職員や子どもたちは、校長の人柄を見ています。教職員

は校長の人柄を感じ、この校長のもとで働きたいという意欲が高まると思います。校長こそ、誰よりも道徳教育を意識して自身の人柄を磨き続けるべきだと確信しています。今もN先生から学ばせていただいていることの中に中心になっています。

二 道徳の授業実践を最重視する

学級担任として、常に道徳の時間を要とした学級経営に努めてきました。教務主任、教頭、指導主事、校長と立場は変わっても、道徳の授業を提案（公開）し続けてきました。退職の年である今年度も、自校の全クラスでの道徳授業、小山市内外の小中学校で依頼を受けての道徳提案授業をさせていただいています。教師として本当に有り難いことだと実感しています。これからも機会をいただけるようでしたら、道徳の提案授業に積極的に取り組むことを通じて人柄を磨くことに努めていくつもりです。

平成三十年度から、「特別の教科 道徳（仮称）」が本格実施となる予定です。道徳教育の不易なところを大切に継続するために、変えなければならぬところが「特別の教科化」だと思います。「特別の教科化」は、「道徳の時間」を「道徳の特性を踏まえた新たな枠組みによる教科化」をしようという提案です。道徳教育充実の大きなチャンスです。そして、自身の道徳授業力向上だけでなく、各教科の授業力向上のための大きなチャンスでもあります。先生方の主体的な取組を期待しています。

そして、先生方には「特別の教科 道徳（仮称）」に取り組むことを通じて、自身の人柄を磨くことを忘れないでほしいと願っています。最も人を動かす影響力は人柄なのです。

小山市立大谷東小学校 中山和彦

私は、教員採用試験五回目の挑戦で教員の道をスタートさせました。この間、民間会社にも就職しましたが、どうしても教員になる夢を諦めることができず挑戦しました。採用試験の面接の時、「どういふ教員になりたいのか」という質問があり、私は迷うことなく「卒からはみ出し、手がかかる生徒から必要とされる教員になりたい。」と答えたことを覚えています。この考え方は三十四年間、私なりに貫いてきたと自負しています。ところで教師の仕事の最大の魅力は、人間の成長に携わる仕事であること、また、教師との出会いが生徒の生き方や成長に大きな影響を与えるという重大な責任と使命をもつ仕事であると考えてきました。だからこそ、教師を本当に求めている生徒たちにとって存在感のある、頼られる教師でありたいと思ってきました。これは、私の教員生活の原点の一つです。

幸いというか不幸というか、最初の勤務校は生徒指導が困難な学校でした。手がかかる生徒とことん向き合ってきました。時間に関係なく関わりましたが、最後まで気持ちが通じ合えない出会いもありました。しかし、大部分の生徒と気持ちが繋がれたと思っと思います。とことん向き合うことの限界は今でも正直わかりませんが、その生徒を何とかしたいという気持ちを持ち続けることで、色々な考えが浮かび、これと思ったことを実行に移してきました。当然、関わる中で衝突することもありました。何度も何度も衝突すること、互いに理解が深まり、本音で話ができる関係が築けました。逃げたら終わりだということ学びました。教え子の中から「先生のあの一言があつたから・・・」「あの時、本気になってしかつてくれたから・・・」「将来教師になりたい。」等の声を聞いた時、自分

の考え方は間違っていなかったと思うことができました。

もう一つの私の教師としての原点は、初任校での数々の教えがあります。初任校になんと十七年間も勤務することになり、多くの先生方と出会いました。この出会いが教員として成長してこられた原点だと思っっています。教員としての姿勢、生徒指導のノウハウ、教科指導でプロになること、さらには、組織でどのように仕事をしていくのか、良好な人間関係や職場環境づくりのコツなど数え切れません。厳しく指導されたこともありましたが、教員としての土台がここで固められたと感謝しています。生意気にも言いたいことも言わせてもらい、時には先輩に喰らいついたりもしました。それでも思いを受け止めてくれた先輩や教頭、校長先生がいました。やりたいと思っただけに理解をいただき、それこそ無我夢中で生徒と向き合っていました。人との出会いが教員としての成長にとって大きな力となったことを噛みしめています。初心忘るべからず、教員になった原点を忘るべからずです。これらの思いを込めて学校経営にも携わってることができました。

最後に三十四年間の教員生活の思いから

- 一 学校は誰のためにあるのか、教員は誰のためにいるのか、そして何のためにいるのかが全ての判断基準です。生徒のためと思っただけは迷わず実践すればよい。
- 二 生徒の心に寄り添った教員でありたい。決して見放すことなかれ。思いは、必ず通じることを信じて生徒と向き合えばいい。
- 三 教員として、日々、情熱とチャレンジする気持ちを持ち続けよ。
- 四 対応力をつけ、足腰の強い教員になれ。困難を乗り越えてこそ対応力がつくはず。

昭和三十年生まれ。戦後の混乱期が収まりかけ、まさに新しい時代への活力に満ちてきた時代である。物心がついた頃、家では、雑木を燃料としての炊飯、お風呂沸かしであり、水道は無く、井戸水をポンプで五右衛門風呂にくみ上げていた。これらは、私と妹の日課である。家業は農業と当時の時流に乗った炭焼きであった。多くの人が出入りしていたこともあり家族だけの夕食というのはほとんど無く、いつも炭焼き仲間の誰かが一緒にいた。もちろん大人の男たちは、熱燗で一杯やっていた。「冷や酒は体に毒だ」が口癖だったような覚えがある。その場で世間話を聞いた。

記憶の糸をたぐり寄せた一番先には、多くの変化の経験がある。まず、洗濯様式の変化である。洗濯は大変な作業であったから。たらいでの手洗いから、洗濯機が入ってきた。一槽水切りローラー付き、その後二槽の脱水機付き、ずっと後になっての全自動洗濯機、妻と感動したのを覚えている。次に炊飯器がある。ガス炊飯器から電気炊飯器、保温機能は無く、ジャーという物に入れ替えて保温した。そして、冷蔵庫が入ってきた。最初の物は、霜取りを自分でやった。そのうちに自動霜取りができ、霜無し、さらには、自動製氷機能付きまでになった。道路の整備と交通事情の変化も著しい。舗装された道路は、所々にしか無く、季節毎に地区の人たちが集まり道普請なるものを行って整備していた。いわゆる地域共同体が大きな力だった。また、車のタイヤが泥に埋まってみんなで押し出すのは日常茶飯事であった。車も二輪車、いわゆるバイクから、三輪車、四輪車に変化した。ミゼットの荷台に乗って仕事の手伝いをしたことを覚えている。このガソリン機関の進歩

では、馬や牛での農耕から、耕運機、トラクターと変化した。また、稲・麦を鎌での手刈りから、バインダー、コンバイン、乾燥は、おだ掛け天日干しから、石油バーナーへ。一晩中炎を手動調整することから、コンピュータにより自動制御が可能となり、水分含有量15%に合わせるのは、ボタン一つになった。このような劇的な変化の時代を生きた感激と苦勞の経験を伝承することは、自分たちの役目と思える。教育に携わる者が新しい時代を生き抜くための多くの智慧もそこに有る。現代は、変化が目に見える部分から、情報を操作するなど目に見えない部分の方が大きな割合を占めようとしている。このような今まで経験したことのない社会に生きる道を見つけるには、いつの時代でも、自らの勉強と先輩方からの教えを受けることが大切と感じる。

教育は、どのように変化してきたのだろうか。黒板とチョークは相変わらず必需品である。提示の方法は、OHP、VTR、実物投影機、デジタル黒板等、当時私は顕微鏡を画面提示できる装置を導入できたときは大きく授業内容が深まったと感じた。PCもデスクトップからラップトップ、ノート、タブレット、またスマートフォンと多様化し、接続も有線から無線、WiFiに至る。その利用も情報リテラシー、インターネットの活用、eラーニング、デジタル教材、反転授業の試みまで大きく変化している。しかし、「教育とは何であろうか？」という問いに対しては、目に見える変化の内容よりもむしろその目的が浮かぶ。やはり「人格の完成を目指し」である。先輩たちには、不易と流行を自分なりに使い切る技量と手放さない腹のくくりを後輩たちに伝承することとともに、後輩たちには、これから進む道を見定めるために先輩からの教えを請うことを望んでいる。

教師を目指そうとはっきり思ったのは高校時代であった。良き友人や先生に出会い、人間は面白いと感じたことが動機である。また当時、全盛であった青春ドラマに登場する熱血教師のカッコいい姿に影響されたのも事実だ。その頃の自分は、教師という職業を漠然としたイメージで捉えており、実際に教壇に立った後に思い知る自分自身の未熟さなどは、思いが至らなかつたのである。

教師になって五年目は、私にとって試練の年であった。自信を持って臨んだ中学三年生の私のクラスから、ありとあらゆる問題行動が起こった。喫煙、万引き、家出、不純異性交遊等、次々に起こる問題に、初めて「疲れた。」と感じた時であった。三年間担当した子ども達に裏切られたような気持ちになっていた。そんな私の心境を見透かしたように、先輩の先生が私を呼んで話してくれた。「人間関係がないんだよ。自分をわかってくれる人の言うことは聴くものだろ。」その先輩の口から出た言葉は、私の胸に突き刺さった。勤めて五年目になり、この世界でもなんとかやれそうだと感じていた自分の思い上がりを正してくれたのである。それまでの自分は、子ども達を三年間の中でしか見ていなかった。「この子が大人になる上で、このことは大切な問題」という指導の視点が欠けていた。そして何よりも「子どもは元来、未熟で失敗をすることは当たり前であり、その失敗を通して成長していく存在」という認識が足らなかつたのである。人に何かを教えることには一生懸命であったが、人を育てるのに必要な根気や温かさがなかつた。先輩の一言は、人の一生に大きな影響を与える教師という仕事の意味を、改めて教えてくれた一言だった。

この出来事は、私にとって大きな節目となった。子どもに対する見方や接し方が根本的に変わっていった。すべての子は愛されたいと願っているし、認められたいという願いを持っている。そして言わせてほしいと思っている。その存在自体が美しく、たくましく、面白いのである。そんな気持ちで接するようになってから、自分の前にいる子ども達が、より愛おしく感じられるようになった。自分がこの子の立場だったらか、自分がこの子の親だったら今の自分の指導をどう感じるだろうかという、それまで考えたことがなかつた視点で、自分の指導を考えるようになった。「先生、変わったね。」などと同僚や卒業生に言われたのもこの頃である。

教育という言葉には「教える」と「育てる」という二つの漢字が使われている。まさにこの仕事の本質を言い当てている二文字である。大学で学ぶのは主に教えるための知識や技術だが、現場では、異なる子ども一人一人を育てるといふ、時間と手間がかかる作業が待っている。良いと思う指導をしても全ての子に通じるわけではない。中には受け入れてくれない場合も起こり得る。そんな場面に出会った時が大切だ。プロとしての自分の指導に何が足りなかつたかと謙虚に考えることである。今までの自分を改革することは、つらいことでもある。正しいと思ってやってきた自分を否定することから始まるからだ。しかし、教師のために子どもが生まれたのではなく、子どものために教師ができたのである。教師が子どもを育てるのも事実であるが、逆に子どもが教師を育てるのもまぎれもない事実だ。教師の自分も成長途中の未熟な存在だということを忘れてはならない。

「さつき、言ったばかりなのに…。」

「昨日、教えたところなのに…。」

「あれほど、言ったのに…。」

というような声が聞こえてくる時があります。私自身もこれまでの教職員生活の中で何度も口にしてきた言葉ですが、校長になってから余計と気になるようになりました。みなさんもこのような言葉を口にしてはいませんか。

これは、校長の学校経営方針を伝える年度始めの会議において職員に話してきたことの一つです。「話したつもり、教えたつもり、伝えたつもり、つもりの教育を先生方はしていませんか。」という話です。伝える立場にいる人は、自分の思いや考えが相手に伝わっていると勘違い、又は、思い込みをしまい、前文の言葉を往々にして発してしまいます。

「伝える」ということは、本当に難しいことだと実感しています。校長は職員に、担任は学級の生徒に思いを伝え、目標に向かって一つになつて学校を、学級をつくっています。教科担当は、生徒の力を高め、夢、目標の実現に向けて支援しています。難しいことをわかりやすく、また、自分の思いを聞き手の一人一人に応じて伝えていくことは本当に難しいことです。自分の思いを伝えるためには、自分自身が内容を十分理解しわかった上で伝えることや、相手の表情、雰囲気把握すること、相手の意識を引きつける話し方をするなどが必要だと思っています。

校長が自分の思いを生徒に伝える場が、朝会や集会です。朝会や集会での話は、校長がする大事な授業だと日々考えています。しかも、限られた短い時間の中での授業ですので、校長としての思いがどうやったら生徒に伝えられるかを、先輩校長に聞いたり、以前にかえた校長のやり方を思い出したりしながら工夫してきました。

私がやっていることは、生徒が話を聞いて「さあやってみるぞ。」というような元気が出る話を考えることです。生徒の関心を一点に集めるために、伝えたい知らせたいと思う言葉を大書して演台の前やホワイトボードに張り出す。数年前はA3用紙九枚を貼り合わせて一枚にしましたが、今は大判プリンターを使っています。一語一語に思いを込めて生徒の表情を見ながら話す。校長の話を思い出してもらうために、集会で使用した用紙を廊下や昇降口、階段踊り場に掲示する。こんな些細なことですが、思いを伝える一助になっていると自分では強く思っています。

生徒会役員選挙立候補者が意気込みを語る演説の中に私の話からの引用が聞かれたり、その後の生徒会活動に反映されたりしたこともありました。また、卒業間近の三年生から、「朝会での話が楽しみでした。」と書かれた色紙を受け取ると、私の思いが生徒に伝わっていたんだということを実感でき、とてもうれしい気持ちになりました。

私が校長として赴任した三校の生徒は、いずれも話を聞く姿勢、態度が良かったことです。生徒の学校、職員への信頼感があるために、聞く雰囲気良くなり、思いを伝えることが容易になったのだとも思います。生徒、職員、保護者が、共に信頼しあう活気ある学校をつくるために、「伝える」力を高め、つもりの教育をなくしてほしいです。

「教師は、五者（学者・医者・易者・役者・芸者）であれ」と言われるように、さまざまな技量が要求される職業です。そして、その技量を發揮する場も、教科指導・生活指導から校務分掌の業務に至るまで極めて広範囲です。従って、教員となって日の浅い先生にとつては、未経験の分野に挑戦しなければならぬ日々の連続かもしれません。それらのことに失敗を恐れず、積極果敢に挑む頼もしい先生がいる一方、「それは私の苦手な分野なので・・・」「今までやったことがないので・・・」と消極的になってしまふ先生もあり、残念に思うこともあります。

若い頃の教え子、M君を紹介します。

M君は卒業と同時にガラス食器を製造する会社に就職しました。彼は生まれながらに右手に麻痺があったため、製造の仕事ではなく、材料や製品の運搬、工場内の清掃などの雑用を担当するという約束で入社しました。そんな彼が、卒業してから五年ほどたったある日にプレゼントを持って訪ねて来ました。プレゼントは、デザインはシンプルだが、曲線が美しい淡いブラウンの『水差し』でした。当然、会社の商品を持ってきてくれたものと思いましたが、その『水差し』は、M君が自らの手で一人で作ったものでした。信じられない思いでした。

後日、会社の方からM君の仕事ぶりをお聞きしました。M君は、右手の障害のため、当初は仕事が遅いだけでなく、製品を落とすなど失敗の連続で、誰もがM君には仕事を続けるのは無理だと思ったそうです。しかし、M君は挫けることなく、足りないところを穴埋めしようと、朝一番に出勤し、仕事の準備などを行っていたそうです。そのような一生懸命な姿勢に、いつしか社員さん方も心打たれ、空き時間になると、ガラス管の吹き方やガラス製品の作り方を教えてくれるようになったということです。そして、いつの間にかプレゼントのようなガラス器を作るまでになったということです。

松下幸之助氏は、「知識が乏しく、才能に乏しい点があっても、強い熱意があれば、そこから次のものが生まれる。自身が生まなくても、思わぬ援助が生まれてくる。熱意は、鉄粉を引きつける磁石のようなものである。」と言っています。M君の懸命さも磁石だったのかもしれない。

私は農業の教員であり専門は畜産です。しかし、畜産を担当したのは、三十年間の教員生活の中で僅か数年しかなく、稲や野菜などの担当に終始しました。「畜産といえれば〇〇先生」と言われるような、専門知識と技術に秀でた教員になりたいという思いは達成できなかったものの、他分野の経験は、その後のいろいろな場面で大いに役立ちました。加えて、諦めずに取り組めば大抵のことは克服でき、その仕事の中で喜びを見出すこともできるといふ経験を持てたことは、大きな自信・やりがいへと繋がりました。

学校は、組織として様々な課題に対処していかなければなりません。皆が嫌がる仕事も、誰かがやらなければなりません。計り知れない可能性を秘めた若い先生方には、意に沿わない仕事や未経験の仕事であっても、失敗を恐れず、ぜひ挑戦してほしいと思います。それらの経験は、大きな力となって、間違いなく次に生かされると思います。

平成三年、いきなり県教委社会教育課（現在の生涯学習課）への異動内示が出て、不安を抱きながら新しい職場に赴いた。最初の半年間は、社会教育の何たるかも知らないまま、前任者から引き継いだ業務をこなすだけで精一杯の辛い日々が続いた。九月から国立社会教育研修所（当時）の社会教育主事講習を受け、やっと自分の置かれた立場や職務が理解できてからは少し気持ちを楽に職務に専念することができた。

平成三年から四年にかけては生涯学習が華々しくスタートした時期であり、本県では社会教育課が生涯学習課に改組され、生涯学習推進本部の設置や推進計画の策定などが一気に進んだ時期である。県総合教育センターの開所、生涯学習施設としてとちぎ海浜自然の家の開所など、まさに生涯学習の黎明期であった。先輩職員は崇高な理念のもと熱く激論を戦わせながら仕事に打ち込んでおり、私も大いに刺激をもらったものだ。

そこで自分が担当した職務は様々であったが、特に印象深く記憶に残っているのは、平成四年九月からスタートした毎月第二土曜日を休業日とする学校週五日制のスタートにあたり、広報パンフレットを作成する仕事だった。広範囲に及ぶ事前協議と決裁を伴う責任の重い仕事だったが、先輩方に助けていただき完成したときの達成感や行政の仕事とは違うものかと実感させられるものであった。五年間の教育行政で、苦労もあつたが何とかやり遂げることができたのは、教職出身、行政出身に関わらずスタッフの温かい指導と協力があつてのことである。今でも当時の仲間に出ると、苦労を共にした同志のような当時の連帯感が蘇り、温かい気持ちになる。

社会体験が乏しいのではないかと、何かと批判される教員であるが、学校とは別の環境に身を置いて、「教えること」以外の仕事を体験することは意義深い。私も、様々な社会教育関係団体といわれる青年団、女性団体、子供会育成会などとの交流や、知事部局・市町村教育委員会との連携などを通して、自分の世界がかなり広がったと感じている。小中学校の先生方との間に交流の輪が広げられたことも有意義であった。

再び学校に戻ったとき、生徒たちに向き合う姿勢も変わったようだ。教育は学校だけで完結するものではない。生徒たちに、生涯にわたって自ら学び続けようという姿勢を身につけさせることに主眼を置かなくては、という意識が強くなった。これは大きな収穫だったと思う。しかし、なんとと言っても一番の収穫は、本来の居場所に戻って「やっぱり教員っていいものだなあ。」と実感できたことである。自ら選択して教育行政の道に進んだわけではなかったが、このような機会を与えていただいたことに感謝している。

後輩たちに伝えたいことは、機会があれば学校以外にも目を向けて欲しいということである。残念なことに、管理職時代、社会教育主事講習や社会体験研修などの募集があつても、なかなか若い教員を送り出せなかった。主な理由は、夏季休業中などの過密スケジュールにある。教員の多忙感解消への取り組みが進められてはいるが、夏休み中の勤務については整理が必要だと感じている。その上で、若い教員には様々な体験を通して教員としてのスキルアップに挑戦して欲しいと思う。学校教育以外にも教員が社会の役に立てる道は多岐にわたる。少しくらい回り道をしてでも学校以外の世界を覗いてみてはどうだろうか。それによって人間的に成長した教員から生徒たちが得るものは大きいはずである。

元 栃木県立栃木女子高等学校 松 田 美智子

やってみなけりゃわからない

今日も朝からS君のおしめ替えに格闘しています。その私の後ろで、保育士をしている教え子のMさんから、「先生まだそんなこともできないの。私の倍以上給料もらっているのに。」と言われていたような気がしました。実際には、Mさんはそんなことを思うような子ではなく、いろいろ助けてもらっていたのですが。

高校での教員生活二十年目を過ぎて、私は足利養護学校(特別支援学校)への異動を希望しました。数年前から養護学校への異動を考え、知り合いの先生に話を聞いたり、学校の様子を見せてもらったりして自分なりの準備はしていたものの、実際にやってみると想像していたこととは大違い。朝のSHRをやっている時間に、自分がおしめと格闘しているなどとは想像もできませんでした。特に、重症心身障害児病棟での経験は驚きの連続です。医師、看護師、保育士など様々な職種の人たちが一緒に働く世界では、それぞれが自分の専門の分野で、子ども達にアプローチしていきます。プロの教育者であるあなたは、いったい何をやっているのかを問われ続けた四年間でした。同じような価値観の集団の中でしか仕事をしてこなかった私には、日々自分の存在価値をつきつけられる厳しい職場でした。

その五年前、私は壬生高校で学年主任をしていました。なかなか担任の先生とうまくコミュニケーションがとれないこともあり、自分のリーダーとしての力のなさを感じる毎日でした。今考えると、リーダーとしての力など深刻に考えること自体が間違っていたのかも知れません。そんな私は、新たな経験の場所として養護学校を考えました。

そして、さらにその五年前、宇都宮女子高校で様々な才能にあふれる子ども達を前にし

て、いったい自分は何をこの生徒達に与えられるのだろうかと感じ、別の学校への異動を希望しました。

今、私は学悠館高校定時制に勤務しています。「選択とため息」この言葉が私の教員生活象徴しているかも知れません。特別支援学校から学悠館高校への異動。これも自分の選択でした。異動から七年たって、今日もため息をついています。ただ、しょっちゅうため息をついています。自分の選択を後悔しているわけではありません。私の選択はチャレンジといえるほど前向きなものではありませんでしたが、すべて自分自身の選択でした。私のように自分の思い通りに異動できる人はそういないのかも知れません。自分のわがままのために多くの生徒や先生方に迷惑をかけてきました。どれだけ子ども達や学校のために役立ったかはわかりません。ただ一つはつきり言えることは、様々な経験をする中で、自分の人間としての、教員としての幅が広がったことは確かだということです。

新しい選択には勇気がいります。それが毎日の職場の選択であったならなおさらのことです。選択した結果は、そうそう思い通り行くものではありませんが、やはりやってみないとわからないことがたくさんあります。教員として仕事ができるのは、長くて三十数年です。経験できる場所と時間は限られています。「あの学校は苦勞するから行きたくない。」などという思いや、「この仕事はあなたじゃないとできないから、この学校に残ってもらいたい。」などという言葉で、教員としての貴重な時間を自分自身で制限してしまっているかもしれません。人生は選択の連続です。失敗を恐れることなく、新たな世界へ自ら一歩踏み出してみませんか。そこにあるものは、けっしてため息だけではないはず。